

それぞれのリクイェム

あの「戦争体験」を語り継ぐ

平成21年度の文芸特集号合評会では、3月7日(日)午後、東京・原宿の南国酒家本館で開催しました。残念ながら執筆者19人(作品数22)のうち、参加されたのは新登場の2人を加えて4人。急ぎよ入院されたり、他の事情からやむなく欠席されたりが相次ぎました。したがって執筆者本人の言葉に代えて、コメントを寄せていただき、本文中に随時挿入しました。ところで、今回は先の大戦に何らかの形で絡んだものが5編。ことは戦後65年目を迎えますが、70歳以上の世代には戦禍の影ばかりでなく、さまざまな形で戦争体験が人生を染めてい

るのではと思われました。以下に会の模様を紹介します。

文芸特集号合評会

出席者

(敬称略・50音順)

陶 易 王 五百田家の三兄弟(その一)

林 宏 匡 ホルムスク紀行 付ホルムスク追詠

山 田 遼 司令長官の孤独(2)

吉元 昭 治 落語病膏肓(一言)

進行 大出 篤

山田遼先生の『司令長官の孤独』は、

前年度に引き続いて2回目でしたが、戦争と何らかの形で関係している作品は、

新に浅田高明先生の『あの夏 60年目の

恋文』をめぐる追想の前・後日譚」と

きょうお見えになられた林宏匡先生の追

詠を含めての『ホルムスク紀行』、さらに

陶易王先生の『五百田家の三兄弟』、そして

天瀬裕康先生の『壊滅の譜』です。

まず、林宏匡先生の作品から取り上げ

ようと思います。林先生は歌人でお父上

の結社を引き継がれ歌集や外国語(日英

独露)対訳歌集「起世紀」などを出されて

います。今回、初めて紀行文を書かれた

たとおっしゃられています……。

溢れる「望郷」の思い

ホルムスク紀行

嗚呼 ドンパチの悲劇

林 私 私の歌集「薔薇」(1985年刊)で、短歌の一部を外国語に訳してみまし

た。それを当時、目黒の教会の司祭さんで、2004年に99歳で亡くなられましたが、ローレンスさんという方ですが、その方は元東大総長の南原繁先生の短歌を英訳されてから御自身も英語でTANKAを創作するようになったのです。そ



林 宏 匡

のローレンスさんが評価をしてくださった。その後、「TANKAの魅力」という本を書かれた川村ハツエさんという方が旗手となつて、日本歌人クラブからタンカジャーナルが発刊されましたので、早速私もタンカジャーナルの会員として投稿するようになりました。しかし、私が日本語で発表した短歌の形式五七五七七と

歌にこめられた心を外国語に訳すのは難しいですね。

ホルムスク紀行は大変、描写が細かいですね。時間を追って、毎日が実に詳細に述べられています。

林 幸い、弟たちが一緒に、9歳下の弟がメモする時間をくれて……。私一人でしたら他の同行者に遠慮して、こうはならなかったかも。感謝していますし、弟も文章になったことを喜んでくれました。私は追詠の短歌も紀行文も肉親が喜んでくれれば、それでいいと思っています。

まあ無駄な言葉が多すぎて、読んでくださった方が疲れてしまったのでは。こんど書くときは簡潔に思っています。が出来ないでしょうね（笑い）。

敗戦の日を外地で迎えられた陶先生いかがでしょう。

陶 私の場合は……。

ああ、そつでした。先生の場合、中国は外地というより母国でしたね。

陶 樺太のことは知識がないものから。

ドンパチですが、8月15日に戦争が終わらないのですね。22日に熊世峠の激戦、さらに留萌沖の引揚船撃沈の悲劇は23日と1週間後も続いています。日本軍は無条件降伏していませんでしたのですか？

林 当時の樺太には徹底抗戦派の勢力が強かったようです。父は軍の命令で残ることになり、家族が内地へ引き揚げようとしたときソ連軍が侵攻してきて……。

吉元 真岡郵便局の電話交換手も軍命令で残留ですか？

林 当時は玉碎する覚悟だったのでしようね。稚内公園に「九人の乙女の碑」が建っています。

北海道勤務時代、道北旅行で稚内公園の碑文「皆さんこれが最後です。さよなら さよなら」で乙女の悲劇を初めて知りました。

山田 樺太の中心街は……。

林 豊原（ユジノサハリンスク）で官庁などがあり、真岡（ホルムスク）は商業都市の大阪のようなものです。立派な博物館があります。

吉元 ロシアの博物館ですか。

林 ええ、いまは、建物はそっくり旧樺太庁博物館のまま残っています。

山田 陳列品もロシアのもの。

林 そつですが閻宮林蔵の肖像などが展示してあって、ああ良かったなと思いました。菊の御紋章の彫られた国境の標石も一つだけ置いてあった。

吉元 岡田嘉子の越境事件がありました。

林 北緯50度で平坦地です。

山田 戦後初めて行かれたんですね。これまで行きたいとは……。

林 ええ、そつです。弟たちは行っていきますが、開業医ですとなかなか。文中にも出てきますが、山形に引き揚げた親友と一緒に行く約束をしていたのですが亡くなって果たせず残念でした。未亡人

には、この本を差し上げました。

山田 私の母親は樺太生まれ、大泊です。女学校は豊原、結婚して内地へ来ましたが、よく樺太の話は聴きました。練馬区にも樺太連盟のようなものがあってお仲間がいた。ただ姉妹が小樽にいてそこへは遊びに行きましたが、樺太へ行きたいと一度も言いませんでした。多分、変わり果てた故郷を見なくなつたのだらうと思います。

引揚前にロシアの少女と遊んでいましたね。

林 姉がかつて消息を尋ねたのですが分かりませんでした。何年か樺太勤務を終えると引き揚げるよつです。

望郷の念は随所にみられます。記念の写真を撮影したはずでしょうから、載せませんかとお願ひして数葉紹介できました。とくにホルムスクの夕日が素晴らしいですね。もっと大きくすれば良かった。

林 実際の写真はもつときれいです。

「陶家の人々」は断念

五百田家の三兄弟

今後が楽しみな展開

いつもですと目次順に随想から順次取り上げるのですが、今度は陶易王先生の『五百田家の三兄弟』に参ります。まず、陶先生から……。

陶 前に草野心平さんから北杜夫の『椴家の人々』のよつな 陶家の人々を書かないかと勧められたことがあります。私の生家は、いわゆる中支、南京と上海の間。ところが、祖父が清朝の科擧に受かつて東北部（旧満州）の黒龍江の方へ行つたりして、書き出すと切りがなくて……。そこで私も三兄弟ですが、そのまま書くのではなくて、「おれは戦争に行つても一発も弾を撃たなかつたぞ」と話していた友人をモデルにしました。この人はソ満国境で終戦になり、ともかく南をめざせば大連へたどり着くたら

うと、広野を流離^{たらい}つたのです。内地に帰つてからもつと活躍させようと思つていたのですが、長くなりそうなので死んでもらいました（笑い）。

足に負傷した折、看護してくれた玲との結婚も間近に、ハッピーエンドかと思つたのですが……。突然死のあたり、高粱畑を逃亡し、ロシア兵に脚を撃たれた場面と重ね合わせた描写が、とても感動的で効果的でした。

山田 陶先生の作品はユーモアなタッチで大陸的なのですが、先生の持ち味です。また満州が舞台ですから五味川純平の『人間の条件』を思い出しました。

陶 あのように悲惨ではないのです。人物描写でも冒頭の場面で、鼻血を出し飛び込んだ病院が産院。そこで応対に出た看護師との会話も面白かったし、目指す耳鼻咽喉科医院での看護師さんの印象を“ヘコちゃん”と記すだけで容貌から入柄までなんとなく分かる。診察してくれたドクターは手塚治虫の“ブラッ

クジャック”似。

林 書き出しからストーリーがきちんと出来ていて、流れるようにストーリーに入つて行く。私には書くことと思つても書けませんね。

吉元 主人公が自分で手術する場面では、懐かしい薬の名前が出てきますね。陶 昔の診療録というのを感から引つ



陶 易 王

張り出しまして。代々医者でしたから。ヒステリーに重曹とか（笑い）、ジアスターゼもあつたんです。そのほかいっぱい漢方薬の名前が書いてあるんですよ。

林 私の父は産婦人科なんです。よく電話がかかってくる、父は電話口で処

方箋を指示していた。葛根湯だの重曹だの、アスピリンだの、いつも、そういうことばかり言っているんですね。「父さんは同じ薬ばかりしか使わないのか」と思つたんですが、それしかなかったんですよ。思い出しました。

それで治っちゃう（笑い）。

山田 華陀が関羽の肘を手術したとき、関羽は暮を打つていたという話がありますね。

陶 あの頃も飲むと意識がぼつとずる薬があつたようです。華岡清州がやつたように。でも関羽は豪傑だからいらなうと言つて。ぼくは山スキーをやるんですが、むかし友人がスキーを折つて切傷から血が止まらないものだから、雪で傷口を固め、縫い針を持っていたので、木綿糸で縫つたことがあります。

山田 寒冷麻酔ですね（笑い）。

陶 化膿もせずに治りましたが。野戦病院みたい。

吉元 憲兵が持っている拳銃が出てき

ますね。千丁ゼル？

陶 南部式です。重くて反動が大きいよつです。

山田 将校への支給は南部式。私物では千丁ゼルを持っていたかもしれませんが、陶 いまの自衛隊員は三八式を知らないよつですね。

明治三八年製ですか？ 米軍の自動小銃に対して、これでは……。

山田 三八式は性能がいい。弾は少なくてすむから効率的だし（笑い）。

林 ソ連が進駐してきたとき、マンダリン銃を持っていた。あれにはビックリしました。狙わなくても当たるという。吉元 三八式は重かったですね。中学生だったので、長くて背丈にすれすれでした（笑い）。

山田 「医家芸術」に一番たくさん書いておられるのは、陶先生では？

陶 いや、山田先生でしょつ。

定期号にも寄稿されていますから作品数では陶先生、頁数は山田先生でしょ

つが。

山田 陶先生の作品は三人兄弟がテーマですから、今後が楽しみです。

藤倉 続きがどうなるか、期待を持たせる作品です。次号の楽しい展開を心待ちしています。

起きなかつた歴史探る

司令長官の孤独

縦横に人物を創造して

では、山田先生に移ります。先生の太平洋戦争を扱った作品には『もう一つの真珠湾』と『審判』があります。そのほかは知らないのですが。

山田 昭和5年ごろミッドウエー海戦を扱った『海と修羅』が、医家芸術に載った最初の作品です。資料が沢山あるものですよつ。

吉元 阿川弘之には『山本五十六』など海軍提督の本があります。これもいづれ本になさるといいですね。

山田先生の作品は『もう一つの真珠湾』と『審判』も刊行されていますし。

山田 一昨年まで連載した『蘭溪の玉』も本になりました。これもそのうちに。ところで山本五十六を扱つのは2度目ですよつ？

山田 そうです。前回は、もし彼が南雲に替わって、直接、真珠湾攻撃を指揮していたらという設定だったので視点が違います。今回は出来るだけ史実に沿って書き進め、その枠内で作者の観点や主張を盛り込みたいと考えています。

吉元 私の友人の父上が連発自艦隊の軍医長。長官の搭乗機が撃墜されましたね。そのとき同乗していた。

山田 高田六郎という人。
吉元 ええ、そのとき大佐だったかな、のちに中将だかに。

山田 一番機が撃墜され密林の中で全員戦死。参謀長らの乗った一番機は海上に墜落して救助された。山本長官は頭部に貫通銃創を受け軍刀を手にして死んで

おり、一方 高田軍医長の外見は異状がなく、長官を機外へ運び出したあと側に斃れたようです。検死の結果、死因は頭蓋底骨折です。死亡診断書が残っています。

吉元 軍医長の奥さん、つまり友人の母上は、昔の人らしく毅然としていますが、終戦後は苦労されたようです。その同級生は、私の学校の教授になりました。

『司令長官の孤独』は2回目、まだ全貌が明らかにはなっていません。モチーフというか執筆の動機は何でしょうか。

山田 アメリカではいまだに「真珠湾攻撃は日本軍の騙まし討ちだ。リメンバールパールハーバー」と言っているが、これはおかしい。もつ一度調べ直してやろう。というわけです。現在からすれば、あれはとんでもない事が起こったんですね。もともと真珠湾奇襲作戦という発想は、海軍になかった。それが、山本

長官があらゆる反対を撥ね退け押し切った。だから、普通は起きるはずがないことが起きてしまった。

三島由紀夫が「歴史は起きたことを記録するが、起きなかったことは記録され



山田 遼

ない……それが欠点だと述べています。だから私は、起きるはずだったのが起きず、起きないはずのことが起きた……そういう視点で書いてみようかと思っていました。

吉元 あ、どのくらいですか。先生の御作には臨場感があり、そこにいたように思えます。素晴らしいです。

山田 さあ、書いている本人が分から

ないですから（笑い）。

山本長官支持派は少なかつたですね。南雲中将ら首脳部の主だつた立場の人は慎重論というよりか反対派。

山田 それは当然でしょう。あの当時、急速に発達した航空戦力の実状は海軍部内でもよく理解されていませんでした。だから山本の計画は失敗すると考えるのが常識だつたと思います。

吉元 暗号が解読されたというのは、山田 外交文書は早くから解読されていた。海軍関係はミッドウエーあたりでは読まれていたようです。

議論のやりとりもフィクションですか。

山田 私の創作です。この人物はこういふことを言つたろうということも想像して、講師師、見てきたような嘘をつきますよ（笑い）。白井喬司という作家がいまして。

『富士に立つ影』ですね。

山田 彼はすごく珍しい資料を出すん

ですが、ほとんどウソなんです（笑い）。作家によっては資料を自分で創作しますよ。逆に吉村昭は徹底的に資料に忠実です。しかしながら小説ですから、どちらが正しいとは言えないんです。

山本五十六については、新橋芸者の梅黄河台早代子という愛人が有名です。山本に入れ揚げていた彼女は、晩年は沼津に引き籠もったのですが、医芸の会員の望月良夫さん（故人）と交流があり、五十六の手紙をたくさん披露していました。

また当時、若手の芸者だった新橋の料亭「こすが」の大女将がお座敷での五十六の様子を話してくれたのですが、まるで土方の大将みたいな風貌で、皿回しをしたり、でんぐり返しをしたりして、端正な米内光政とは大違い」だったと。人間の魅力に溢れていたようです。

大きなことをする人物

山田 長岡の出身で、幕末の河合継之助に通じるものがあるようです。近く

の鶴岡市からは陸軍の石原莞爾が出ています。

林 その後、どのような心理的な駆け引きで、司令長官が真珠湾攻撃を決断するのか、次回が待ち遠しく思います。

藤倉 本格的な作品なので言うことはありません。山田先生の力量にただただ敬服しています。

その後の全経過克明に

壊滅の譜

映像でぜひ見てみたい

天瀬先生は昨年が続いている「レーゼ・シナリオ」です。今回は8月6日の原爆投下によって犠牲となった移動演劇桜隊の鎮魂歌である『壊滅の譜』を寄せられました。先生から自作についてのコメントを紹介します。

天瀬 新藤兼人氏の「さくら隊散る」とは別の観点から描きました。主役が座長（隊長）の丸山定夫でな

く一番長生きした（といっても8月24日死亡ですが）仲みどりに焦点をあて、全隊員、全経過を出すようにしました。国立広島原爆死没者追悼平和祈念館（9名全員の写真を収納）を出したのも新しい試みです。

私は戦時中の戦意高揚映画「阿片戦争」を観ています。小学校4、5年生の頃です。丸山貞夫がアヘン窟に潜入する役で、これは母に教わりました。

山田 園井恵子は映画「無法松の一生」で、車夫役の阪妻が密かに思いを寄せている未亡人を演じたとても綺麗な女優さん。

吉元 宝塚出身の女優 エノケンと共に演じた映画を新宿で見ている。

山田 藤沢周平原作の「武士の一分」という映画に、壇れいという園井恵子とよく似た女優さんがいた。

あの日、桜隊の人々に何が起こったのか、時系列というのでしょうか、刻々と、しかもたんと追っています。そ

れが却って惨さを客観的に正確に記録する
という効果を高めています。

山田 せひ映像で見たいですね。

クラブの委員長太田怜先生が東大医学部2年生で出てきます。仲みどりが大病院にきて、原爆症認定患者第1号になるのですが、そのときの院内案内ほかの資料では太田先生が3年とあるようですが、天瀬先生は「本人に確認して2年だったことを確認された」と話してもらえます。

生粋神田っ子の裏芸

膏言(盲)

道教からの息抜きに

大変遅くなりました。吉元先生の創作落語『膏言(盲)』を取り上げてくださいます。先生は小平市医師会に所属され、花小金井で開業されてました。著書に本誌「ほん」でも紹介した『日本全国神話伝説の旅』や『北京探訪』などがありま

す。そこで私は先生が神田っ子だったとは、ついぞ思いませんでした。どつりで江戸情緒にも詳しいわけだと納得したのですが……。

吉元 いや、お恥かしい。ちょっとHなところもあって、実は私は漢方や鍼もやっています。そちらの関係誌にエッセイなどを書いてました。これも、その一つなんです。



吉元 昭治

そして、この「医家芸術」をあちらこちらに配り、ある出版社にも送ったんですが、社長から「先生、もう少し書いてくれたら本にしますよ」とおだてられて。そこで、また書いているんですが、落語はともかくとして、これまでも単行本は

50冊以上書いてます。道教を御存知でしょうか。

陶 タオ(道)ですね。

吉元 ええ、私は日本医学史学会にもいて、鍼灸などに触れますと、どつしても道教や老荘思想に繋がっていく。そこで、息抜きのような他愛のない話が頭に浮かんできて……。

落語の世界は大家さんも若旦那も長屋の住人の熊さん、八さんも汪洋とした好人物が多いですね。漫才ですと、ボケと突っ込みの担当が分かれますが……。

山田 一人でしゃべっているからかな。先生、次はどんな落語ですか。

吉元 「クルクルパー」という噺。寅さんみたいな男が主人公で、幽霊が出てくる。吉原の花魁に騙されて心中した男が、女を捜して、「うらめしや……。」と。「らくだの馬さん」ではカンカンノウ踊りがありますね。こちらの噺も手振りをああしろ、こうしろと、いろいろあって……。(以下、オチまでありますが略し

ます。

書いているうちに、どんどんストーリーが広がっていく。

山田 実際には高座で聴かれるのですが、吉元 子どもの頃は、奇席がたくさん周辺にありましたから、連れてってもらって、いまは専らテレビです。

山田 艶っぽい話、廓ものなぞはいかがですか。

吉元 殿様が吉原に行つて、家来が大門を、ここはお城の入口とかかいうのが……。落語はバカばかりいうので面白いです。あと書いたのは熊と八がお伊勢参りする話、京都を回つて帰ってくる。

弥次喜多の現代版

山田 東海道中膝栗毛です。

小説は書きにならない？

吉元 先生方のよつな力はないですよ、藤倉 一度、本格的に落語家にしゃべらせたいです。落語脚本家としても才能が十分認められます。

実験にフィクション交え

あの夏 60年目の恋文

「ここで浅田先生の『あの夏 60年目の恋文』をめぐる追想の前・後口譯」にふれていただきましょう。まず浅田先生自身のコメントを次に紹介します。

浅田 殆ど実験に基づいたものですが、登場人物が(一部の著名人を除いて)、大方、インシヤルになっている件、何分にも昔のことゆえ

細かい点になりますと、さすがに記憶も曖昧、不確実、かつ些かの関係者のプライバシーをも慮つて、やむなくフィクション絡み? の仕立てにせざるを得ませんでした。

その辺りも含めて、諸先生方の殿しいご批判、ご教導を賜りたく、なにとぞ、よろしくお願ひ申し上げます。次第です。

書き出しの部分はNHKで放送され

た感動的なドキュメンタリー・ドラマですが……。

山田 たしか最初のテレビ映像は実名ではなかったですか。本文中、いろいろな方々が出てきますが、インシヤルですと分かりにくくなります。最後の付記にある「K市A川畔」も金沢市浅野川でいいのでは。

SF的で楽しい

詩・蝙蝠／天国との通話

ここで、常連の方々の作品にも触れていただきたいと思います。最初に藤倉一郎先生のコメントを紹介します。

藤倉 ます詩「蝙蝠」について。

黄昏の頃私はあてもなく散策の道すがら、蝙蝠を見つけて、不安はさらに増幅するのです。これは病気で、

山田 非常に心やさしい詩を書かれる。少し暗いけど、蝙蝠は終末的なものの象徴でしょう。一方「天使」は、あたかも

レイモン・ペイネの絵に登場する主人公たちのような可愛い存在、また随筆の、天国との通話」はSF的で、ひねりが利いていて面白い。

語字を勉強しなくても、外国人と会話が通じたりして。

陶 いつぞやテレビの何でも鑑定団で棟方志功の版画を出品した人が、霊媒の鑑定で「本人がわしの絵だす」といつているから本物だ」と何千万円の値をつけた。結果は安物(笑)。霊媒では怪しげな通信ですが、先生のは楽しいですね。

意欲作だが用語が難しい

赤い光芒

浜名新先生の脳外科医師と患者家族の話「赤い光芒」は3回目です。先生から執筆内容についていただきましたのでご紹介します。

浜名 A病院の事例回想は、デーとと 片麻痺に「気づく」危機を乗り

越えての2章です。

は、救命手術を終えた医師の西沢が、救急外来での脳アンギオで手伝ってもらった佐藤ナースにデートを申し込みます。夕方、Mホテルで中国料理を堪能しながら医療状況を話題にします。展望ラウンジで西沢は愛の告白をします。息抜き場面を挿入しました。

は、手術を受けた杉原勇は術後意識が回復するにしがたが、左の手足が動かないことに気づきます。どうしてなのか？ 術後8日目に急変するも運が強いのか彼は生き延びます。片麻痺が回復しないことに、治療の失敗ではないかと医師を憎み不信を募らせます。その過程を叙しました。

なお、挿話として60歳代の女性の「くも膜下出血」で手術の待機中に、破裂脳動脈瘤のある内頸動脈に強い血管攣縮の出現で、広範な脳梗塞が

ら脳ヘルニアに進展した事例では、次第に不規則呼吸に陥り、人口呼吸器管理をするも脳死に限りなく近づき、心臓停止に至る場面までを描きました。

文章と一体のカラー写真

蝶の楽園

カラー写真を初めて掲載しました。林先生の「ホルムスク紀行」は、現在の樺太を彷彿とさせますし、大塚博太先生の『蝶の楽園』も色がないと、幼虫の姿が見えてきません。写真は文章と同じく雄弁に状況を語ります。それだけに色が生きていたと思えました。

藤倉 蝶と作者の営みが美しく、詩的で、冬月号もまず第一に読ませていただきました。羽化し飛び立ち行く自然の不思議と、人の心の美しさは素敵です。

一枚のパンフから“出逢い”

「チャップリンを聴く」

チャップリンは戦後、たくさん映画が公開され評価は高いのですが、戦前にも来日して大歓迎を受けています。トークショーを聴いた小南長次郎先生は、感想を以下のように寄せています。

小南 昨年2月、東京医科大学病院隣のホテルの地下のエレベーターの前の店に、「チャップリン誕生/120周年記念」のパンフレットを見つけ、読んだことがトークショーを聴くことになり、その結果、今回の一文を書くことになった。

特にパンフレットで惹かれた個所は『あのチャップリンが日本にやってくる!』ことと、四男のユージン・アンソニー・チャップリンに会ってみたい。日本人秘書の高野虎市氏の遺品展などから映画だけでない

チャップリンの世界を発見したい好奇心と期待に掻き立てられたことだった。また二度ほど会ったことのある映画評論家の淀川長治氏から、チャップリンの話聴いていたこともある。

今回のトークで発見した記述は、本文に述べているので省くこととし、ショーの成功はチャップリン研究者の大野裕之氏の幅広い知識と分析秘められた部分を掘り下げて、ユモアを交えて通訳してくれたこと、ユージン氏の心を開くようにもって行った斟酌と技量を大いに称えた。

あの一枚のパンフレットを読んだことが、このような展開になるとは、^{ゆめゆめ}努力想像もしなかった。唯、驚きの一語に尽きる。まさかユージン氏と私がチャップリンのオブジェを挟んで写真撮ることは考えてもいなかった。「夢現といった心境」です。

《合評会を終えて》

先人の名作も儂が



午後1時から3時半まで、たっぷり話しましたが、しばしば本筋から脱線した雑談の中に、面白い話が出ま

した。たとえば、3月10日が間近だったからでしょうか、東京大空襲の体験談そのほか昔の外科手術、軍装の話などに花が咲きました。十数年前になりますが、私は存じ上げないのですが、武者修行をする武者の話とか、「バー・シヤンのママ」を書かれた西郊文夫先生とか、山田先生の作品評に出てきた沼津の望月良夫先生、時代小説に挑まれた鈴木玲之先生らのお名前も上がりました。この3氏は既に故人です。

新年度の文芸特集号発行は10〜11月ごろになりそうです。大勢の会員から、珠玉の掌編を寄せていただきたく今から準備の程お願いします。(大出 篤)